草子ブックガイド 早稲田文学編④

玉川重機 わせだ湯

この本で昭和の時代や戦後にじかなかった道具達を知るのも何か興味深かったですよ まさしく「時代」を感じる一冊でした

バクダンや焼酎にカラメルでコハク色をつけた〝ウイスケ〟という戦後のバケモノ酒。

開高さんホカロンに驚いてます。最先端だったんですね——。

もみもみ

開高さんが道具達に愛されたのは喜びも悲しみも希望も絶望も全てをなめつくすように体験し「生きる」をとことんまでしたからだと思います

「生きる」を愛する人は道具にも優しくされるんだなー と思いました

使い捨てられるほどめまぐるしく新しい道具が出てくる今、どれだけの人が道具に愛されているだろう

どれだけの人が道具に愛されるような生き方をしてるだろう

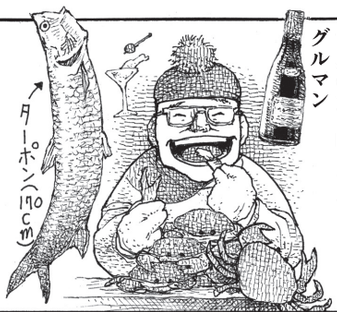
この本の冒頭に「長い旅を続けて来た時間と空間と、生と死の諸相の中をそしてそこにはいつも、物言わぬ小さな同行者があった」とありました 私も——

人生の同行者、「道具」達から愛されるような「生きる」をしたい

悠々として、急げ

開高健の出会った道具たち

- 越中褌（ふんどし）
  - 重力と恩寵。
- 鞘付きナイフ
  - 牛の肋肉を塊で焼く「アサード」をナイフで切り取って食べると、エル・マチョ（男）な食べ方に。
- ガスライター
  - 炎と煙の芸術を技術に変えゆとりと遊びを奪ってしまった。
- シケモク巻き器
  - 戦後、街でひろった吸殻をほぐして巻き直して吸った。
- ウエンガー ナイフ
  - ポータブルファクトリー（携帯用工場）。ポケットの工士場。
- パイプ
  - シガレットは昼の実具。パイプは夜の虚具。
- ラッキーストライク
  - 戦後、シケモクの煙になれた体にラッキーストライクの煙は細胞のだだに恍惚がしみわたったという。
- ベルト
  - 使い古したベルトは痛ましく懐かしい。出来たらどこかにそよほて養老年金でも出してやりたい。
- モンブラン
  - ボケて手垢とインクにまみれた1本のエボナイトの細筒に心臓が託され指の1本となった。
- オイルライター
  - つきあううちに心も頭もある指の1本になる。その、たくましさ。
- 蓋付懐中時計
  - 〝時間〟と〝時刻〟は現代人の強迫観念の幻影では。
- 人体、手釣り
  - 何が先進で何が途上か。運動、造形、構築、ムダのない機能美が現代美の理想なら原始的な手釣こそそれがある。
- モスキートコイル
  - アラスカの蚊（ムースが何万匹もたかられ死んでしまう）VS キンチョー蚊取線香



開高健の出会った道具たち

開高健（かいこうたけし）〈1930〜1989〉

寿屋（現サントリー）で数々の名コピーを生み出し、一九五八年第三八回芥川賞を「裸の王様」で受賞、一躍脚光を浴びました

その後、作品を発表する傍ら、この世の全ての酒を飲み、巨魚を釣り上げ、熊掌燕巣、世界の食を喰らいつくしたグルマン

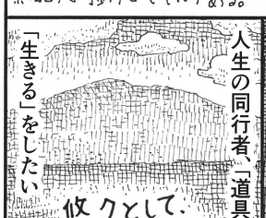
そのために世界四三ヶ国を旅した、エネルギッシュに「生きる」をした人

旅先で、戦後に、戦地で、大河で、開高さんはいたる所で「正真正銘」のものと向かい合おうとします

そのそばには、いつも愛おしくなるような道具達がいました

開高さんが駆け抜けた時代、「昭和」その頃の道具は単純明快でだから身体と心の奥底に染み込んでいったのかなと思いました そして道具に「人格」を見る事もできたのでしょう

1965年2月14日、ヴェトナムの戦地で200人の部隊の中、17人生き残りの1人となり死を実感する。

その「生きる」の傍らにいつもいた道具達との出会いを書いたエッセイが「生物としての静物」です

イラストもいっぱい！